

体も心も成長し、通院「卒業」

自閉症の子、告知も

自閉症スペクトラム障害の男子高校生A君は、幼い頃から療育相談や言語療法などを行い、薬物療法も併用してきました。一時期、不登校にもなりましたが、高校1年の1学期は無事過ごすことができました。

高校では大好きな「鉄道研究会」に入部。外出を嫌っていたのに、週末はカメラを持って仲間数人と電車で遠出もしている

ようで、A君はその様子をいきいきとした表情で教えてくれました。

以前、A君から「なぜ自分はずっと通院しなければいけないのか」「自分は病気なのか」と質問されたことがありました。母親からの希望もあり、彼には、

自閉の特徴があることを伝えました。告知後も、彼は診療を拒

否せずに通院してきました。

「A君、本当に楽しい高校生活ができているね。朝、ちゃんと自分で起きて登校して、こんなに自分の話もできる君はもうこの外来は卒業でいいね」。そう言う「僕も先生がそう言うんじゃないかと思つて来たんですよ」。『では、卒業にしよう。握手』。

自分自身を知る気持ち芽生え、自分と他人の特性の違いを比較して考えられるようになり、学校や家庭、医療機関など周囲の環境が本人の自立をうまく支えられるような態勢ならば、私は親の同意のもと、診断名を本人に告知するようにしています。

ただ、それは慎重に行います。というのも、安易な告知が

子どもの生活に重大な不利益をもたらすこともあるからです。「自分は発達障害という病気だから、できなくても当たり前」などとカミングアウトすることで、他の子にからかわれて、不登校になってしまうこともあるからです。

発達外来では、幼児期からの診療が十年余りに及ぶことがあります。どの時期に診療を「卒業」するか、非常に難しい問題です。ただ、自閉症の子どもたちも身長が伸びるのと同じように、心も必ず成長します。きまじめにルールを守ろうとし、他者への関心も芽生えてくる。自発的に協調性を持つとうと努力するようにもなります。そうなる、と、そろそろ診療の卒業時期が近づいているのです。

独協医大越谷病院子どものこころ診療センター教授

作田亮一

